

1999年7月8日 富良野

TVドラマで知れ渡った「北の国から」のロケ地に向かう観光バスの多い布部川沿いのアスファルト道路をやり過ぎて、砂利道の布礼別川林道に入る。例によって妻も前方の蝶影を見逃さないような運転で進んでくれる。やがて湿り気のある路面で吸水する複数のコムラサキに会う。あまり気乗りはしないが、妻が「せっかくだから採ったら」と勧めるので降りて1頭をしとめる。三角紙に納めて車にもどろうとしたそのとき、車より後方の路面にオオイチモンジが舞う。この絶好のチャンスをしっかりモノにして車にもどるや「私のゆうことをきいたおかげよ」とやられる。

どんどん進んでやや明るく開けた場所の向こうに長い木陰が続く沢沿いの林道に近づいたそのとき。木陰がはじまるすぐの路面にひとときわ白帯が目立つオオイチモンジがいる。♀である。すぐにネットをかぶせたらまちがいなく採れるタイミングだったと思うが、これこそVideo撮影の対象だ、との考えが優先。その準備にかかった矢先、夢中で吸水している限りそう簡単には飛び立たないだろうと勝手に思ったのは裏腹に、突然飛び立って沢沿いに遠ざかる気配。あっけにとられてVideo撮影を忘れてネット片手に走り出す。オオイチモンジはネットをどのタイミングで振ろうかとの当方の迷いを見透かしたかのように、身体のごく近くの旋回もふくめて滑空を繰り返したあと、急速に周囲の樹林めがけて高度をあげ、日当たりのいい梢むけて飛び去ってしまった。旋回の段階で勇気をもって振りぬけばネットインできたかもしれない、など、後悔をすればきりのないくやしい時間ではあった。強がりやをいうとすれば、♀であっただけに、卵をたくさん産んで、次の機会への楽しみを増やしてくれるにちががなく、採れなくてよかったかもしれない、と。

この日は富良野のラベンダーや美瑛の広大な風景もみてから小樽まで移動しなければならぬ状況下、さらに奥へと探索した時点で、妻は先ほど逃した新鮮♀をなんとかしとめさせてやりたいと思ってくれているらしく「もう少しねばっていいよ」と最初の路面に戻る。そこで黒っぽい蝶が目に入り「降りてみたら」と勧めてくれる。やや大型のミスジチョウだとわかり、もうネットインする対象ではないのもどろろとしたそのとき前方湿地でオオイチモンジがヒラリと舞う。きわめて新鮮な♂である。路面上で吸水態勢に入り静かにおちつくのをまってゆっくりネットをかぶせてゲット。「またしても私のいうことをきいたおかげでしょ」「ハイハイ、感謝々々ですよ」



June8, 1982 上高地産



990708 富良野布礼別川林道

2007年7月12日 大雪湖

大雪湖の近くまでくると、明らかにオオイチモンジとわかる飛翔が車窓を横切る。木陰に車をとめてネット片手に降り立つと、周りには食樹のドロノキの大木があり道路と平行にとんでくるオオイチモンジがみえる。明らかにそれとわかる水溜りがあるわけではないがチョウは砂利道を転々と旋回しては静止する。新鮮オスである。オオイチモンジは吸水中にネットをかぶせても動じることなく吸水しつづける驚異的な鈍感さを示すという記事を読んだことがあるが、必ずしもそうではない。タテハ属のチョウにネットをかぶせたとき、採集者のとる常套手段はネットの底(先端)部分を持ち上げて上部に空間を作る。そうして自然に上の空間部へと移動するチョウをピンセット利用で三角紙に回収する。これが一般的



200712 大雪湖 オオイチモンジ♂



手法なのだが、オオイチモンジにはこの方法が通用しないのだ。夢中で吸水をしている場面でも記事のような状況もあるだろうが、わずかの湿り気を求めて静止しているオオイチモンジを相手とした筆者の経験の多くでオオイチモンジは実に頭がいい。ネットをもちあげてできる上部空間には目もくれず、地面とネットの間に少しでも脱出できる隙間はないものか、と地面を離れることなく鋭く羽ばたきながら動き回るので。今年は、愛山溪、大雪湖、石北峠、丸瀬布と、実に4-5回はこの動きとの戦いで、狭い空間で動き回るためきれいな鱗粉がはがれ落ちないように、ましてや羽が汚損しないよう、このチョウの回収には手を焼いた。